都留市史編纂委員会　編：

『都留市史　資料編　都留郡村絵図・村明細帳集』

都留市　1988年3月

A4判　430ページ 付録村絵図4点 7,000円

近年自治体史編纂事業において，絵図資料集の刊行がとみに目立つようになった。

本書を紹介する前に，現在に至るまでの絵図資料の取り扱われ方について概観してみよう。まず，初期の段階として絵図をそのまま写真撮影し，付図として添えたものがある。この方式は，早くには『神奈川県史　資料編6　近世3』(1973)，『神奈川県史　資料編9　近世6』(1974) にみられる。その後，『徳島市史　別巻　地図絵図集』(1978)，『龍野市史　第5巻』(1980)，『岩槻市史　近世史料編Ⅲ』(1981)，『佐渡　相川の歴史　資料集5』(1983)，『山形県史　資料編18　近世3』(1983)，『平田町史』(1984)，『長野県史　近世資料編　第9巻全県』(1984)，『三芳町史　史料編Ⅰ』(1986)，『三原市史　第6巻　資料編3』(1986) 等々がある。これらに取り上げられた絵図の主流は村絵図もあるが，国絵図・城下町絵図・街道絵図等が中心で，原寸あるいは縮尺した原図をカラー・モノクロでそのまま提示したものである。

次の段階になると，付図ではなく，村絵図を独立させて資料集としたものがある。『羽曳野市史　史料編別巻　古絵図地理図』(1985)，『伊勢崎の村絵図　第1集』(1982)，『明野町史資料集第12集　明野町の村絵図』(1986) は，絵図を史料としてどう処理するかという点についての可能性と限界を提示している。

『羽曳野市史　史料編別巻　古絵図地理図』は，豊富な絵図をカラー写真で提示し，かつそのなかから5葉を付図として添えて，個々の絵図について解説している。しかし，絵図自体に書かれた文字を解読する作業は一切なされておらず，付図がそのまま資料集化された観がある。また，B5判であるため，良好な写真ではあっても，原図が大きいほど細部は読み取りにくいという難点がある。

『伊勢崎の村絵図　第1集』は，モノクロの写真とそれを解読した2枚がセットで構成されている。これは，難解な古文書を活字に置き換えたことと同じ意味をもち，積極的に絵図の情報を拾えることで画期的な手法である。しかし，モノクロがゆえに絵図本来の色彩が伝達する耕地の種別，川・用水，道等が同一のトーンでしか表現されてこないため，川と道の区別がつかないといった致命的な欠点がある。これがモノクロではなくカラーの原図とこれを解読したものとのセットで示されていれば，先の欠点は解消されたであろう。

これをさらに改善したのが，『明野町史資料集第12集　明野町の村絵図』である。これは，色の情報をモノクロのスクリーン・トーンに置き換えて表現したもので，この利点は原図がなくても原図の持つ情報を読み取れることである。しかし，B4判であるため，大きな絵図になればなるほど表現される活字が小さくなってしまい，細部までは読みとりにくいという欠点がある。

このように絵図史料，特に近世の村絵図に関しては，歴史地理学の分野で早くから木村東一郎氏が着目したが，近世史の立場から村絵図を正面きって取り上げ始めたのは，先の刊行状況をみてもごく最近のことといってよいだろう。近世村落史研究において村絵図が注目され始めたのはごく数年来のことで，村落景観の研究との密接な関わりのなかで，絵図をどう処理するのかが，まさに当面の課題となっている。

こうした観点から絵図をみると，絵図の取り上げ方は，① 絵図をそのままカラーあるいはモノクロの写真で添付・掲載したもの(『神奈川県史　資料編6　近世3』『羽曳野市史　史料編別巻　古絵図地理図』等)，② ①に直接か，あるいは別途のモノクロかトレースした図に記載された文字を活字で置き換えたもの(『佐渡　相川の歴史　資料集5』等)，③ 原図をトレースしてイラスト化をほどこしたもの(『伊勢崎の村絵図　第1集』『明野町の村絵図』等) の3通りの方法がある。こうした各資料集における長所・短所は，絵図を文書と同様に読み込んでいくためにはどのように処理すれば活用できるのかを試行錯誤してきた過程でもある。

前置きが冗長になったが，現在までのこうした一連の経過を考慮に入れ，『都留市史』を開いてみよう。

本書は，前半が村絵図，後半が村明細帳からなっている。構成は，以下のようである。

口絵

発刊にあたって

凡例

郡内地域の村絵図・村明細帳と森嶋其進

Ⅰ　発刊のねらい

Ⅱ　近世の都留郡

Ⅲ　村絵図と村明細帳

Ⅳ　森嶋弥十郎其進

村絵図：都留市，富士吉田市，河口湖町，足和田町，鳴沢村，忍野村，山中湖村，道志村，秋山村，大月市，上野原町，その他，87葉。

村明細帳：都留市，道志村，大月市，上野原町，小菅村，丹波山村，46点。

この構成からも明らかなように，絵図と絵図を読み込むに当たっての基本史料のひとつである村明細帳がセットになったことが従来の村絵図資料集に付加された点である。この視点にたったものとして管見のかぎりでは，『羽村町史史料集第7集　村絵図・村明細帳』(1981) があるが，本書ほどのボリュームと体系性はない。

本書が刊行された背景には，文化3年（1806）松平定能により編纂された『甲斐国志』の作成時に提出された村絵図と村明細帳の大部分が，都留郡内に現存しているというきわめて恵まれた状況がある。しかし，当然散逸もあるため村絵図と村明細帳がセットになる村は都留郡内の旧村111か村中20か村，村絵図のみの村は47か村，明細帳のみの村は9か村であり，都留市内旧村のうち文化期のものを欠く場合は村絵図・村明細帳ともに他のもので補い，市外については文化期のもののみとした。この結果本書には111か村中72か村の村々が収録されている。改めていうまでもないが，都留市域のみならず行政体の枠を越えて都留郡内の村々にまで調査を進めた結果，史料として非常に利用価値の高いものとなった。

本書の前半部分の村絵図は，各村の概要説明とその村絵図がセットになって構成されている。たとえば，絵図№34の境村（都留市）をみると，村の立地，絵図の読み取り，検地帳の地積，村明細帳からの情報，さらに昭和55年国勢調査の結果等が叙述され，村絵図・村明細帳以外の史料や聞き取り調査の成果も取り入れ，近世から現在に至るまでの村の様子や変化がわかるようになっている。また，随所に絵図上に描かれた寺社や小祠の現在の姿，集落の家並，周囲の景観の写真が掲載されていて，絵図と現況の対照ができるようになっている。

各村の概要説明に続く次のページには村絵図が配置されている。村絵図は，見開きで左ページにカラーの原図，右に同サイズのモノクロ版に原図と同じ位置にほぼ同じ大きさで解読した文字が打たれている。この形式は，先にあげた②の方式（絵図に直接あるいは別途に記載された文字を活字に置き換えたもの）にあたる。左ページの写真はA4判ということもあり良好で見やすいが，右ページはモノクロ版の上に直接活字が打ち込まれているため細部については見にくい所もかなりある。

本書の方式は，左右2枚の図を対比することによって，村を認識することが可能である。しかし，実際に村を歩くフィールドワークには，③の方式（原図をトレースしてイラスト化をほどこしたもの）のように一枚からすべてを読める情報が必要であり，この点では本書の長所は逆に短所となっている。少なくとも，これをそのままフィールドワークに携えていくわけにはいかないだろう。

さらに，本書には付図として以下のものが添付されている。

年不詳	上谷村屋敷割絵図
天保15年9月	下谷村屋敷割絵図Ⅰ
天保15年9月	下谷村屋敷割絵図Ⅱ
天保10年9月	平栗村絵図

これらはいずれも本書の編集方針と同じように，カラーは原図，モノクロは解読図となっている。これらはいずれも屋敷・耕地が一筆ごとに記載された緻密な図のため，所定の大きさでは収まらずこうした処理になったと思われる。しかし惜しいことには，付箋がそのまま区別されずに記載されているため，史料としての厳密性を落としていることである。検地帳における付箋の処理のごとく，絵図における付箋も文書同様に扱うべきであろう。

本書に示されたさまざまな村絵図をみていると，山合いの狭小な土地に展開しているであろう耕地と集落，背後の重畳する山々といった景観を彷彿とさせるものがある。これを可能にした撮影技術の良さも，史料を読む上での大きな要素である。

このように本書には，意識するしないとにかかわらず，村落景観研究の手段としての村絵図の活用方法の試行錯誤が反映されている。その意味では，豊富な史料提供と解読作業は現在の時点での水準を示したといえる。また，村絵図と村明細帳を通して都留郡内の歴史とそれを担った人々に関心が深められるという初期の目的は充分に達成できたと思う。さ

らにこの立派な装丁の資料集を廉価で入手できるのも大きな魅力で，こうした措置を可能にした市当局の英断は賞賛に値しよう。

最後に村落史研究の立場からいくつかの要望を述べると，カラー・モノクロの絵図にさらにイラスト化された第3の図が加えられたら，その活用域はさらに広がるであろう。原図を見ないでも，フィールドとする村の概要が一枚の図から判明すれば，内外の研究者にとっては資料としての互換性が可能となり，地域内にとどまっている村絵図研究に普遍性を与えることになる。さらに，自然地理学の分野で多用される地形図・航空写真の利用と対比，民俗学の立場から香月洋一郎氏が行った地籍図を対応させつつ耕地の変遷を追う方法（『景観のなかの暮らし』，1983）から学ぶべき点は多い。いずれにせよ，絵図を単に解読するという初歩的段階は越えた今，さらにより明快な表現手法上の問題，また村況を示す一般的な絵図以外の雑多な絵図の活用方法等々，課せられたものは多い。

（橋本直子）